様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：挑戦的研究（開拓）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ０５２９７・２０Ｋ２０３１８

研究課題名（和文）高齢者の健康自立寿命延伸のための社会的活動性維持向上プログラムの研究開発と試行

研究課題名（英文）Research and development of social activity's maintenance and improvement program for elderly people's health

研究代表者
大方　潤一郎（Okata, Junichiro）

東京大学・大学院工学系研究科（工学部）・特任教授

研究者番号：６０１５２０５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　19,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、高齢者の社会的活動性の概念の検討を行った上で、低下の機制に関するデータの分析に基づき、活動性の維持・向上のためのプログラム開発と実装を行った。このうち、低下の機制については、千葉県柏市在住の高齢者を対象にしたコホート研究（柏スタディ）のデータを用いて、その機制を詳細に検討した。
次に、社会的活動性の維持・向上の方法については、千葉県柏市で、高齢者の通いの場である「地域活動館」の実装と検証と行った。２年間にわたる実装と検証の結果、日常生活圏域に多彩なプログラムが提供される場を設置することで、様々な利用動機を持つ後期高齢者を中心にソーシャル・ネットワークが維持されることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、理論研究やコホート研究の知見に基づき、高齢者の社会的活動性の概念定義や、活動性が低下する機制を明らかにしたことが挙げられる。また、実装研究に基づき、活動性を維持・向上させる「地域活動館」方式を開発できたことも意義として挙げられる。社会的意義としては、社会的活動性を維持・向上させるプログラムの運用のポイントを明らかにできたことである。具体的には、移動範囲が狭まる高齢者が利用できる日常生活圏域への場の設置、様々な利用動機を持つ高齢者のニーズに対応した多彩なプログラムの提供、参加を促すプログラムの運用上・空間上の工夫、運営団体が協働しやすい協議会方式の導入といった要素である。

研究成果の概要（英文）：This study developed and implemented a program to maintain and improve older adult’s active level. The program was developed by defining the concept of social activeness in the ageing society and analyzing the mechanism of its impairment. The impairment mechanism was explored in detail by using the cohort data that targeted community-dwelling older adults of Kashiwa City, Chiba prefecture. A method to maintain or improve one’s social activeness was assessed by launching a community-space (Chikikatsudokan) at Kashiwa City, where older adults can go to attend recreational activities. After two years of implementation and research, the results showed that arranging a place that provide broad range of activity programs within the periphery of one’s daily life contributed to sustainment of the social network of old-old adults. Various types of activity programs answered to the multiple participation motives of older adults.

研究分野：都市計画

キーワード：フレイル　社会的活動性　コホート研究　プログラム　ソーシャル・ネットワーク　地域活動館

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1.　研究開始当初の背景

超高齢社会を迎えた日本では，一人ひとりの高齢者がより積極的に高齢期を過ごすこと，そしてそれを後押しするような物的・社会的環境を整備することが重要となっている。実際に，高齢者の「サクセスフル・エイジング」や「ヘルシー・エイジング」の達成のためには，病気や障害がないことや，高い身体・認知機能を維持することという「健康」にかかる要件だけでなく，社会への積極的関与という「社会参加」にかかる要件があることが知られている。

申請者らが実施した千葉県柏市における高齢者の大規模コホート研究（柏スタディ）の分析からは，高齢者の自立度の維持およびウェルビーイング（well-being）の向上のためには，社会的活動性の低下（社会的虚弱化：social frailty)が，加齢による心身の衰えの初期の進行に強い影響を与えていることが示唆されている。活動性の低下の例は，話し相手がいないこと，楽しく過ごす仲間がいないこと，食事を一人でとること（孤食）等である。このような社会的虚弱化が続くことで，口腔機能の低下や鬱の発生，食欲不振による筋力低下等が生じることが明らかになっている。

社会的虚弱化の防止の方策については，例えば，教育学では行動様式の観点から生涯学習やボランティアへの参加の重要性が指摘されている。また，公衆衛生学では人間関係の観点から友人・知人が沢山いる方が健康であるという指摘や，建築・都市計画学では空間の観点からコミュニティ・スペースの充実が健康に寄与していること等，各分野特有の観点から研究が進められてきた。

しかし，高齢者の健康自立寿命延伸に向けては，これらの各分野の知見を統合させ，空間，行動，社会関係の 3 点から，高齢者の社会的虚弱化の予防の方法を総合的に明らかにする必要がある。

2.　研究の目的

本研究の目的は，分野横断的アプローチを通じて，高齢者の健康自立寿命を延伸することに向けて，高齢者の社会的虚弱化の機序とその予防の手法を明らかにしようとするものである。具体的には，（1）高齢者の社会的活動性に関わる個人および地域レベルの要因の特定，（2）高齢者の社会的活動性の維持・向上を可能にする標準的手法の構築，（3）モデルフィールドにおける標準的手法の試行（介入），（4）以上をまとめた社会的展開戦略の策定を行うこととした。

3.　研究の方法

本研究では，図 1 に示す通り，3 年間にわたって下記の 4 つの研究を進めた。

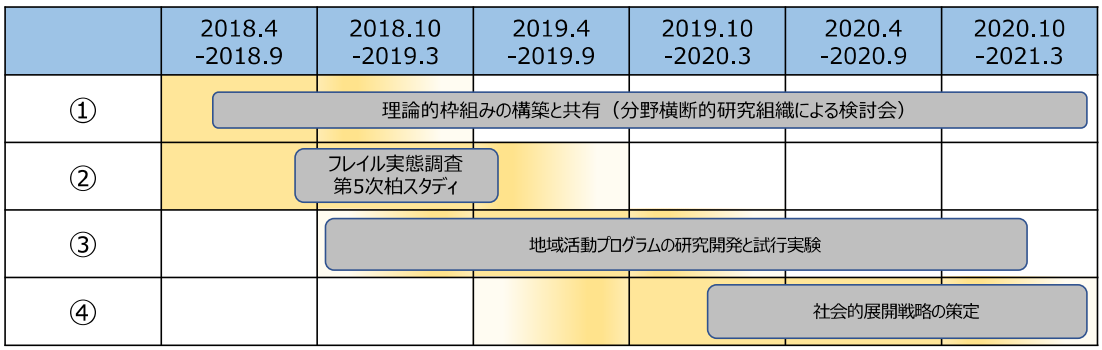

図 1 研究のスケジュール

① 理論的枠組みの構築と共有：医学，看護学，公衆衛生学，生涯学習・社会教育学，社会学，建築学，都市計画学をバックグラウンドにもつ研究者らと分野横断型研究体制を整備した。このメンバーで，月に 1 回程度の定期的なステアリング会議を開催し，本研究をマネジメントするとともに，各分野の既往研究に基づく，分析モデルを補強した。

② 高齢者の社会的活動性に関わる個人および地域レベルの要因の特定：申請者らが 2012 年度より継続実施してきた千葉県柏市の大規模高齢者コホート研究（柏スタディ）に，高齢者の社会的虚弱化に関わる質問紙調査を加え，第 5 次調査を実施した。この，身体（口腔含む）・認知・社会性にわたる精緻かつ膨大なデータベースに関して，マルチレベル分析やパネルデータ分析を実施した。

③ 高齢者の社会的活動性の維持・向上を可能にする標準的手法の構築と介入：上記のコホート研究の分析結果をもとに，高齢者や地域住民にインタビュー調査やグループワーク等を実施した。量的データ解析と質的データ分析を行い，高齢者の社会的活動性の維持・向上を可能にする標準的手法を明らかにし，高齢者への介入プロセスモデルを構築した。こ

のモデルに基づき，複数のモデルフィールド（千葉県柏市，神奈川県鎌倉市，岩手県大槌町，秋田県秋田市等）において，高齢者への介入プログラムを実装し，空間，行動・行動様式，人間関係・社会関係の変化を起こすように働きかけ，実際に高齢者自身が社会的虚弱化を予防することができるのか，その効果を検証した。

④ 社会的展開戦略の策定：身体機能・認知機能が低下しても，理解・維持・適応しやすい「社会的コード」を読み解き，どのような高齢者に対して，どのような活動プログラムの提供が適切かを検討し，他の地域に展開可能な戦略を策定することにした。

4. 研究成果

本研究では，（1）社会的フレイルや，社会的活動性に関する概念共有と理論的枠組みの構築に基づき，（2）大規模コホート研究の分析により，社会的活動性が低下するメカニズムを明らかにした。さらに，（3）社会的活動性を向上するための地域活動プログラムの検討を行い，最後に，（4）社会的展開戦略に関する議論を行った。

(1) 社会的活動性に関する概念の検討

本研究では，まず，社会的活動性に関する共通理解を図ることにした。東京大学高齢社会総合研究機構（IOG）に所属する教員・大学院生を中心に，分野横断的研究組織による検討会を定期的に開催した。先行研究や既存事例のレビューを通し，社会的フレイル等の概念共有と，理論的枠組みの構築を進めた。また，社会的活動性を向上させるための標準的手法と，それを実現する地域活動プログラムのあり方を検討した。

検討の結果，本研究における「フレイル」の定義が明確となった。ここでのフレイルとは，加齢により保有するフィジカル（身体的）・メンタル（精神的）・ソーシャル（社会的）な能力や資源が貧困化し，脆弱性を抱えている状態と定義することができる。この定義に基づき，社会的活動性の低下がどのような状態であるかを，図 2 のように整理した。

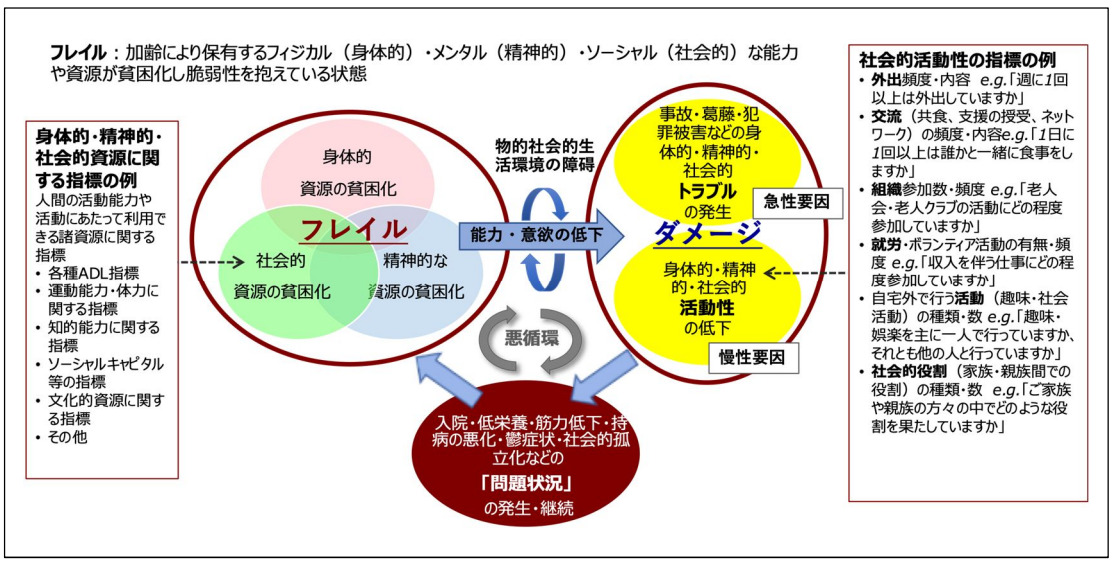

図 2 研究の枠組み

(2) 社会的活動性の低下のメカニズムの検討

次に，社会的活動性の低下のメカニズムを検討するために，千葉県柏市における高齢者大規模コホート研究（柏スタディ）の第 5 次調査を実施した。社会的活動性の指標として，外出頻度・内容，交流（共食，支援の授受，ネットワーク）の頻度・内容，組織参加数・頻度，就労・ボランティア活動の有無・頻度，自宅外で行う活動（趣味・社会活動）の種類・数，社会的役割（家族・親族間での役割）の種類・数を用いた。また，空間，行動・行動様式，人間・社会関係，身体的・精神心理的・社会的フレイルに関するデータも同時に収集した。2012 年からのデータと，今回の調査で収集したデータを統合した縦断解析用データセットを作成し，フレイルの進行と社会的活動性低下の機序にかかる多変量解析に着手した。

このデータセットに関して，地域高齢者の社会的活動性に関する多角的な分析を行った。まず，加齢による身体的・精神的・社会的資源の貧困化について検討し，運動機能（ロコモ 25）や認知機能（MMSE）に比べ，ソーシャル・ネットワーク（Lubben Social Network Scale）は，加齢の影響を受けにくい可能性があることを見出した。次に，活動能力が低下した群と維持・向上した群の比較を行い，とくに男性において，乏しい身体資源が活動能力低下の要因となり得ることを明らかにした。また，高齢になっても継続参加できる社会活動の種類を探索し，カメラやカラオケに関する活動には，より高齢な者が参加している傾向があることを明らかにした。さらに，社会

的な資源の貧困化もその種類によって，アウトカムが異なることも明らかにした。

(3)　社会的活動性を維持・向上させるプログラムの特徴

次に，モデルフィールドの 1 つとなる柏市豊四季台団地において，社会的活動性を維持・向上させるプログラムの特徴を明らかにするための実装研究を実施した。具体的には，住民団体が主体的に運営する「地域活動館」というコミュニティ・スペースを，2018 年 2 月に IOG 主導で設置した。この「地域活動館」では，課題とニーズ把握のためのワークショップの開催，活動方針・利用規約の策定，情報交換会の実施等の方法により，運営団体の自主性を高める働きかけを行ってきた。そして，地域の高齢者を主たる対象として，健康づくり，趣味，交流に関する多彩なプログラムを提供することにし，その効果を明らかにするために質問紙調査やインタビュー調査，映像分析等を実施した。

利用者への効果検証として，参与観察やインタビュー調査を実施し，その分析から，継続的なプログラムへの参加については，外出への意欲や，それまでの社会関係だけでなく，場への愛着（Place Attachment）が関連することを明らかにした。また，「楽しむ習字」という，参加者の多い代表的なプログラムの映像分析を通じて，会話を引き出すための相互参照できるツールの準備や，視線の交わりを生み出すための座席配置，講師による積極的な働きかけ等，効果的なプログラムの要素が明らかにされた。さらに，実験的な「ボトリウム」のプログラムに関しては，開催後の半年間にわたる参与観察とインタビュー調査を行った。この結果からは，プログラムの後に定期的に集まることができるような仕掛け（例えば，魚や水槽に関する共通の話題が持てること等）を含むことで，日常生活上の助け合いや，参加者以外へのネットワークの広がり等，社会的活動性が向上する様子が示された。以上の結果は，プログラムの内容だけでなく，その運用やフォローアップの方法が，社会的活動性の維持・向上に大きく関わっていることを示すものである。

次に，実装の効果を検証するために，設置から 2 年が経過した 2020 年 2 月時点で，全利用者に対する質問紙調査を実施した。この調査の分析からは，日常生活圏域に，参加障壁が低い，多様なプログラムを開催する場所を設けることで，外出行動やソーシャル・ネットワークが維持される傾向が明らかになった。また，利用の動機によって，参加するプログラムが異なることも明らかにされた。

さらに，2019 年～2020 年に実施した，運営団体に対する質問紙調査や，インタビュー調査からは，この場の維持のために，運営団体間の連携・協働を促進することが重要なことが示唆された。確かに，実装から 2 年の間に実施されるプログラムの数は大きく増え，共同企画等も実施されてきたが，仲間づくりや参加者間の交流，団体間の連携等が課題となっており，また活動のカテゴリーを超えるような連携がなされていないことが明らかになった。ここから，「地域活動館」の運営には，各団体の活動を調整し，連携・協働を図るコーディネーターの役割が重要になるものと考えられる。この点で，モデルの訴求力という点では課題が残った。

(4)　今後の研究課題：社会的活動性を維持・向上させる複数の手法の比較検討

本研究では，(3) 以外にも社会的活動性を維持・向上させていく様々な方式の実装や検証を行ってきた。例えば，岩手県大槌町の仮設住宅における「居住環境点検」方式について，震災から数年間の介入の再検証を行った。この結果，社会的活動性の維持のためには，地域のレベルで，社会的交流の促進や課題共有体制の構築，共同性の形成等が必要となるため，平時においては自主的な環境メンテナンスの活動が，災害後にはゼロからの居住環境点検活動が必要となることが明らかにされた。また，個人の経験や知識，技能を活動資源として，再活性化するような介入も，社会的活動性の維持には有効であることが明らかにされた。

また，神奈川県鎌倉市大平山丸山地区では，上記の「居住環境点検」を複数回行った後に，住民のアクション・グループを組織化する方式を導入した。地域の支え合いや，移動・外出支援，子育て支援等の高齢者が主体となるグループが立ち上がり，それぞれで住民を巻き込む活動を展開することが可能となっている。この方式については，既存の町内会との役割分担や関係構築を中心に，訴求力のあるモデルを構築することが今後の研究課題である。

この他に，秋田市や福井市，川崎市で展開中の諸方式との比較検討を行うことで，社会的活動性を維持・向上させていくための，各方式の優れた点が明らかにできるものと考えられる。今後は，本研究の体制を維持し，上記の研究課題に対して，「ライフ・レジリエンス（生活自己再生）学」という枠組みをもって，継続的に取り組んでいく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　9件）

１．著者名 荻野 亮吾	４．巻 17
２．論文標題 Withコロナ時代における地域のつながりづくりの方法	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本公民館学会年報	６．最初と最後の頁 57-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24661/kominkan.17.0_57	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Takase M, Ogino R, Yoshida K, Kusu H, Kenmochi T, Goto J	４．巻 6
２．論文標題 Qualitative Research on the Primary Effect of Fish Pet Ownership Using the Bottleium, a Bottle-Type Aquarium, on Community-Dwelling Older Adults in Japan: A Potential Preventive Measure towards Social Isolation	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Geriatrics	６．最初と最後の頁 17pages
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/geriatrics6010017	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高橋 競・高瀬 麻以・荻野 亮吾・後藤 純・飯島 勝矢	４．巻 1
２．論文標題 年齢が社会的健康に及ぼす影響	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ライフ・レジリエンス学	６．最初と最後の頁 8頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 荻野 亮吾・高瀬 麻以・似内 遼一・後藤 純	４．巻 1
２．論文標題 社会的活動性を維持・向上させる場の運営方法:「地域活動館」方式の開発と実装を通じて	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ライフ・レジリエンス学	６．最初と最後の頁 22頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坂井 愛理	4．巻 1
2．論文標題 「社会参加」の会話分析：習字教室における会話の開始を題材に	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ライフ・レジリエンス学	6．最初と最後の頁 10頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中山 莉子・佐藤 浩	4．巻 1
2．論文標題 高齢者の社会参加を促すサークル活動の映像分析：習字サークルにおける「会話に入りにくい参加者」に着目して	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ライフ・レジリエンス学	6．最初と最後の頁 9頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kazembe N, Wang C, Kim T, Higuma S, Kim H, Yang Y, Gandy C.S, Ogino R, Takase M	4．巻 1
2．論文標題 Effects of the COVID-19 Pandemic on Activities of Toyoshikidai ’s Community Space	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Life Resilience Research	6．最初と最後の頁 8pages
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 似内 遼一	4．巻 1
2．論文標題 東日本大震災の仮設住宅地におけるコミュニティの活動性の形成：大槌町の仮設住宅地の住民運営の実態に基づいて	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ライフ・レジリエンス学	6．最初と最後の頁 13頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ito K, Ogino R, Hiyama A, Hirose M	4．巻 11592
2．論文標題 Senior’s Acceptance of Head-Mounted Display Using Consumer Based Virtual Reality Contents	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Zhou J., Salvendy G. (eds) Human Aspects of IT for the Aged Population. Design for the Elderly and Technology Acceptance. HCII 2019Lecture Notes in Computer Science	6．最初と最後の頁 170-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Fukui C, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Yokouchi N, Sumikawa Y, Horinuki F, Baba A, Suto M, Okada H, Ogino R, Park H, Okata J	4．巻 31(12)
2．論文標題 Needs of persons with dementia and their family caregivers in dementia cafes	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Aging Clinical and Experimental Research	6．最初と最後の頁 1807-1816
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s40520-019-01129-2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 後藤 純	4．巻 111
2．論文標題 岩手県大槌町および釜石市におけるコミュニティ・ケアを事例に（特集 緊急時の介護 ： 災害弱者への支援）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 介護福祉 ： 介護専門職情報誌，社会福祉振興・試験センター	6．最初と最後の頁 27-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　3件／うち国際学会　9件）

1．発表者名 中山 莉子・佐藤 浩・秋月 優里・坂井 愛理・荻野 亮吾・後藤 純
2．発表標題 高齢者サークルにおける会話が生じる過程の映像分析 ：「当てどころのない発話」を中心に
3．学会等名 日本老年社会科学会第62回大会（誌上発表）
4．発表年 2020年

１．発表者名 高瀬 麻以
２．発表標題 高齢者の社会参加を考える：千葉県柏市にある地域活動館の事例から
３．学会等名 東京大学柏キャンパス一般公開（オンライン）（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Matsuoka Y, Zhang J, Lyu W, Aoyagi K, Takase M, Ogino R, Goto J
２．発表標題 The Association of Early-Morning Eating Habits With High Nutrient Intake by Older Japanese Adults Living Alone
３．学会等名 GSA 2020 Annual Scientific Meeting (Online)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Takase M, Ogino R, Yoshida K, Kusunoki H, Kenmochi T
２．発表標題 The Effect of Bottleium, a Bottle-Type Aquarium, Ownership on Community-Dwelling Older Adults
３．学会等名 GSA 2020 Annual Scientific Meeting (Online)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Kazembe N, Kim H, Wang C, HigumaS,Yang Y, Kim T, Ogino R, Takase M
２．発表標題 Impact of COVID-19 pandemic on senior-to-senior social engagement activities at a community space in Japan
３．学会等名 GSA 2020 Annual Scientific Meeting (Online)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Kim D, Masuda T, Higuma S, Yang Y, Terazawa S, Takase M, Ogino R, Goto J
２．発表標題 A Community Space with Diverse Activities Support Older Adults’ Social Participation and Sustain Social Connection
３．学会等名 GSA 2020 Annual Scientific Meeting (Online)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Takase M
２．発表標題 高齢者社區照護機構設計 Introduction and Analysis of Toyoshikidai Kawshiwa City Activity Center by IOG
３．学会等名 日台プロジェクト日本法講義（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 高瀬 麻以
２．発表標題 シニアの“いま”を見つけよう！SENIOR MARKETING DAY
３．学会等名 『高齢社会を「地域」から考える～私たちは、これから何ができるのだろう～』（主催：シニアマーケティング研究室）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 坂井 愛理・亀澤 明彦・中山 莉子・秋月 優里・楊 映雪・荻野 亮吾・後藤 純
２．発表標題 高齢者サークルの参加に関する会話分析：見知らぬ他者との会話の開始を題材に
３．学会等名 第61回日本老年社会科学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 坂井 愛理・亀澤 明彦・中山 莉子・秋月 優里・楊 映雪・荻野 亮吾・後藤 純
２．発表標題 会話の開始に先立つ他者の注意の引き出し：地域の書道サークルにおける相互行為を事例として
３．学会等名 第92回日本社会学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Sakai E, Kim H, Kamesawa A, Kim D, Nakayama R, Terazawa S, Ogawa K, Masuda K, Akizuki Y, Yang Y, Yang Y, Suzuki Y, Shah R, Masuda T, Gandy C.S, Maeda K, Takase M, Saisho S, Ogino R, Murayama H, Goto J
２．発表標題 Exploring the significance of the community center to Japanese senior citizens from the perspective of place attachment
３．学会等名 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress,（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Sakai E, Kamesawa A, Nakayama R, Kim J, Akizuki Y, Yang Y, Ogino R, Goto J
２．発表標題 Initiation of interaction as the beginning of social participation: Conversation analysis of a Japanese senior club
３．学会等名 The Gerontological Society of America's 71st Annual Scientific Meeting（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Takase M, Ogino R, Goto J, Okata J
２．発表標題 A comparative analysis of the social support in solitary seniors who attend club activity or go out to see friends
３．学会等名 The Gerontological Society of America's 71st Annual Scientific Meeting（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tanaka T, Takahashi K, Suthutvoravut U, Nishimoto M, Fujisaki M, Yoshizawa Y, Akishita M, Iijima K
２．発表標題 Social frailty as a predictor of 5-year disability and mortality in physically non-frail adults
３．学会等名 The Gerontological society of America, Annual scientific meeting in Boston 2018.11.14-18（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Iijima K, Tanaka T, Takahashi K, Toba K, Koichi K, Akishita M
２．発表標題 Social frailty as a predictor for physical frailty and cognitive decline in community-dwelling elderly adults: From the Kashiwa Study
３．学会等名 The 14th International Congress of the European Union Geriatric Medicine Society, Berlin, Germany,（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 荻野 亮吾
２．発表標題 まちづくりの拠点としての公民館
３．学会等名 第91回すまいろんシンポジウム
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究成果に関するWebページ：ライフ・レジリエンス（生活自己再生）学（https://www.life-resilience.jp）

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	飯島　勝矢 (Iijima Katsuya) (00334384)	東京大学・高齢社会総合研究機構・教授 (12601)	
研究分担者	荻野　亮吾 (Ogino Ryogo) (50609948)	佐賀大学・学校教育学研究科・准教授 (17201)	
研究分担者	高橋　競 (Takahashi Kyo) (60719326)	獨協医科大学・医学部・助教 (32203)	
研究分担者	税所　真也 (Saisho Shinya) (60785955)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・研究員 (12601)	
研究分担者	後藤　純 (Goto Jun) (80584408)	東海大学・工学部・准教授 (32644)	
研究分担者	似内　遼一 (Nitanai Ryoichi) (90795999)	東京大学・先端科学技術研究センター・助教 (12601)	
研究分担者	村山　洋史 (Murayama Hiroshi) (00565137)	地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・社会参加と地域保健研究チーム・専門副部長 (82674)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	小林　寛範 (Kobayashi Hironori)	東京大学・高齢社会総合研究機構・学術支援職員	
研究協力者	細萱　一立 (Hosogaya Kazutate)	東京大学・高齢社会総合研究機構・学術支援職員	
連携研究者	高瀬　麻以 (Takase Mai) (70826320)	東京大学・高齢社会総合研究機構・特任研究員 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関